



地域の底力

新潟県十日町市

過疎化する地域に アートの方が 活性化をもたらす 新潟県十日町市

大雪とともに紡いできた歴史と、
伝統的な暮らしのすばらしさを再発見。
新潟県十日町市の国際的な芸術祭は、
地域の人の心に温もりと誇りをもたらした。

取材・文山内史子
写真 野瀬勝一

2000年から3年ごとに開催されてきた「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」に参加したアーティストにより制作されたモダンアートが、新潟県十日町市内全域に点在する。写真はその中の一つ、「たくさんの失われた窓のために」(内海昭子)。



左／松之山地区の「松陰寺」に残る全国で3体しかないといわれる貴重なマリア観音で、手に子どもを抱いている。右／市街地を見渡す高台に立つ「諏訪神社」。境内には機織りの神を祀る「御機神社」がある。

昔はよかったという意識を大きく変えた芸術祭の開催

新潟県南部、長野県との県境に位置し、人口約五万人を数える十日町市は一九五四年の市制施行以来、幾度か周辺の町村と合併し、東京二三区に匹敵するほどの広さに。その中心の信濃川が流れる一帯の積雪量は、平年で二メートル



「大地の芸術祭のアーティストの視点を通して、郷土料理を含めた伝統文化や農業に動んできた歴史、自然に恵まれた美しい景観など、受け継がれてきた十日町の魅力を再認識させられました」と話す市長の関口芳史氏。

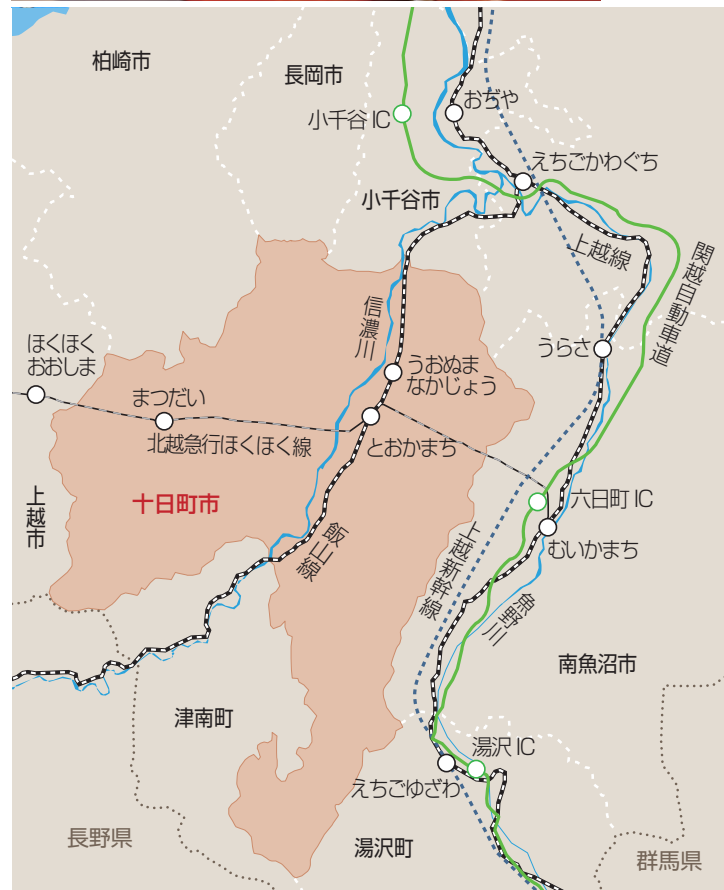
ルほどにもなるが、多い年には四メートルをも超える日本有数の豪雪地帯だ。かつてその産業の要は着物だったが、生活様式の変化とともにそ

の勢いを失っていったと振り返るのは、十日町市長の関口芳史氏だ。東京ほか国内外での勤務を経て、一九九五年に十日町市に戻り、同市助役を経て、二〇〇九年以降、

現職を務める。「故郷に戻ってきたときはバブルも崩壊しており、織物産業の盛んなった昔はよかったという話を結構聞きました」

地域の過疎化も進んでいた十日町市だが、実はここ二〇年で変化を遂げつつある。大きなことになったのは二〇〇〇年以降、三件事情に十日町市と隣の津南町を会場に開催される「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ」。四〇カ国を超える国や地域から招かれたアーティストが芸術祭を重なることに残した作品約二〇〇点

例年5月3日に行われる「十日町きものまつり」では、地元の人も華やかな着物に身を包む。(写真提供：十日町市)



柱状の岩が彩る「清津峡」は、日本三大峡谷に数えられる観光名所のひとつ。峡谷から続くトンネルの景色は、2018年の芸術祭作品「Tunnel of Light」(マ・ヤンソン/MAD アーキテクト)として新たな価値が見いだされた。



が全域に点在し、一年を通して楽しめる上、年四回季節ごとに企画展やイベントも行われている。「今や十日町は大地の芸術祭の里、というブランドができてつつあります。多くの市民が関わりを持ち、『うちには芸術祭をやってるけんね』という意識、誇りが、老若男女問わず市民の中に根付いています。芸術祭があるまちだから住

みたい、働きたいという移住者も多い」

そう関口氏が顔をほころばせた大地の芸術祭は、いったい十日町市にどのような影響をもたらしたのだろうか。

高齢者に元気をもたらした若い世代との交流

大地の芸術祭の総合ディレクターを務めるのは、新潟県出身のアーティスト北川フラム氏(注1)。NPO法人越後妻有里山協働機構事務局長の藪田尚久氏は、その北川氏とともに時間をかけて地ならしをしてきたが、決して順風満帆な船出ではなかったと話す。

「過疎化、高齢化が進んでいく中、市外との交流人口を増やしていく方策を考えないと先々地域は衰退する。その強い危機感から、芸術祭を企画しました。初回開催前の四年間、小さな集落を含めて延べ約二〇〇〇回にもぼる住民向け説明会を行いました。過疎対策に芸術が役立つということを訴え続けましたが、当時は誰も芸術

のまち十日町市を想像できていなかったですね」

今では日本各地で芸術祭が開催されているが、十日町市はその先駆的存在。観光や産業振興ではなく、地域振興が目的であることがほかと大きく異なるという。

「地域の歴史に最大限の敬意を払いつつ、外の人と交わる仕掛けを、との思いがありますから、参加してくれるアーティストの方々には、自身の作品をどう見せるかだけでなく、地域のためにどうすればいいかを考えてほしい、とお願いしてきました」

圏域に広く点在する大小の集落を巻き込むため、作品は意図的に分散して展示。開催当初は作品を置くことに反対の声も少なくなく、設置場所は市有地や市の施設

上/2012年の芸術祭の際に現在の形にリニューアルした「越後妻有里山現代美術館【キナーレ】」は、中庭全体も作品。「Palimpsest:空の池」(レアンドロ・エルリッヒ)。下/「Rolling Cylinder, 2012」(カールステン・ヘラー)ほか、数多くのモダンアートに触れられる。



(注1)北川フラム氏と原田審議委員の対談については、「にちぎん」四五号をご覧ください。



が中心だった。しかし、芸術祭の回を重ねるにつれ賛同者が増え、自分の集落にも作品を、といった声があがっていった。その理由を藪田氏はこう語る。

「芸術祭を観に来てくださる方が増え続け、二〇一八年には芸術祭開催期間中(五一日間)で五十数万人を数えるまでになりました。海外を含め、こんなにも多くの人があるんだと思います。来場者の増加という現実の効果は大きかったですね。さらに見逃せないことは、芸術祭を通じて、地元の方と、外から来る若い世代

「将来的には産業を興す手伝いなど、より踏み込んだ形で芸術祭を開催したい」と話すNPO法人越後妻有里山協働機構事務局長の藪田尚久氏（右）。地元サポーターの樋口道子氏（左）は、「最初はアートのことはよく分からないまま芸術祭に関わっていましたが、ご案内するうちに作品への感想が見た方によって異なることに気づき、面白くなってきました」とガイド中に得た実りを語る。



「花咲ける妻有」（草間彌生）。後ろには北越急行ほくほく線の線路があり、背景を電車が彩ることもある。

との交流が生まれたことです。作品の維持管理などを担うサポーター「こへび隊」に、学生をはじめ国内外から多数の応募がありました。アーティストの制作やこへび隊の活動を地元の人たちが手伝

うという、いい循環が生まれてきました」

芸術作品を作るための大工道具の扱いを含め、若い人たちの様子を見かねて協力するようになったと笑いながら藪田氏の話を継いだのは、地元サポーターとして芸術祭に関わる樋口道子さんだ。

「若い人たちとの交流によって、地域のお年寄りが見違えるように元気になりました。家で毎日食卓にのぼる郷土料理を、芸術祭の参加者の皆さんはおいしいおいしいと喜んで食べてくださったので、もてなしにやりがいがありました。こんな雪国は住むところじゃない、自慢できるものは何もないというのが年配の方の口癖でしたが、芸術祭に関わることで地域の魅力に気づき、自信と誇りを持つようになってきました」

樋口氏は作品を案内するガイド役を担うこともあるが、時には身振り手振りを交えて国際交流を楽しんでいるそうだ。

「織物産業が盛んだった頃は、全国から買い付けの人が集まっています。旅人を歓迎する心は、芸術祭の前から十日町に根付いて

いたのだと思います」

地域が協力して田畑を耕す農業と、にぎわっていた織物産業。受け継がれた心の遺産が、再び花開いていた。芸術祭の思わぬ効果を樋口氏はこう話す。

「芸術祭がなければおそらく縁がなかったであろう地域の方と、新たな交流ができるようになった

のがうれしいですね。今はそうした方々と一緒に芸術祭を盛り上げています」

古民家を再生し、芸術祭の参加者や観光客を郷土料理でもてなす「うぶすなの家」のスタッフとしても働く樋口氏。芸術祭を機に、市民同士で新たな交流が生まれている状況が興味深い。

下／「うぶすなの家」（入澤美時、安藤邦廣）は、茅葺きの民家を再生した作品。中には地元の食材や器を使った食事を提供するレストランがあり、樋口氏も携わる。



芸術祭や作品の場所を示す標識兼作品「妻有広域のサイン」（ジョゼ・デ・ギマラインス）は、市内のあちこちで見られる。



上／「地震計」（オノレ・ドウオー）と、雪国の農耕文化を発信する「まつだい雪国農耕文化村センター「農舞台」（MVRDV）。下／文字通り棚田を舞台にした「棚田」（イリヤ&エミリア・カバコフ）。



「火焰型土器は炎を模したとの推定から名付けられましたが、信濃川の流れを表現したのではないかとの見方もあり、想像力がかきたてられます」という興味深い話を語る「十日町市博物館」館長佐野誠市氏。

縄文文化、雪国の暮らし、織物産業

博物館は深くまちにふれあう場所

芸術祭誕生のはるか昔にこの地で生まれたアート、新潟県で唯一国宝に指定された火焰型土器^{かえん}もまた、十日町市を語る上で欠かせない存在。地域の歴史にふれられる二〇二〇年六月一日開館の「十日町市博物館」でも、展示物の主役を担う。

火焰型土器を中心とした「縄文時代と火焰型土器のクニ」のほか、「織物の歴史」「雪と信濃川」の三つのテーマで展示が展開されている。



上／十日町市博物館の国宝「火焰型土器」。国宝は計57点あり、そのうち26点を展示している。下／縄文時代と中世の遺跡が発見された場所は、「笹山遺跡広場」として整備。復元した竪穴住居が見られる。

るが、開館直後の六月十九日に行われるらしい知らせが届いた。十日町市が申請していたストーリー「究極の雪国とおかまちー真説！豪雪地ものがたりー」が、「豪雪に育まれた『着もの・食べもの・建もの・まつり・美』のものがたりが揃っている」として日本遺産（注2）に認定された、と話すのは同博物館館長の佐野誠市氏だ。

「雪という環境の中、衣食住、さらには祭りと美という形で、我々の祖先がずっと縄文からつないできた系譜が日本遺産に認定された。時宜を得たニュースだった上、博物館の展示とも深く関わりがあるのがうれしかったですね」

屋根まで届くほどの積雪の中で生活する姿を映し出す展示などが



ら、豪雪によりまちの人々がどれほど苦勞を重ねてきたかを実感できるほか、織物をはじめとする伝統的な暮らしが、いかに雪に根付いているのかも理解できる。

そうした豊富な展示の中でも、ずらりと並ぶ火焰型土器の美しさ。十日町市博物館の展示室「雪と信濃川」には、囲炉裏のある古民家を移築。かつての雪国の暮らしをよりリアルに体感できるよう、家中も自由に入ることができる。

（注2）日本遺産／地域の歴史的魅惑力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを文化庁が認定するもの。

と存在感は異彩を放つ。わかりやすい工夫が施され、興味をかき立てられる展示には、佐野氏の強い思いが秘められていた。

「以前、研修のために米国の小さな田舎町を訪れた際、まずは博物館に案内されたんです。そこで我々の祖先はこういう文化なんだというのを見せられたのが非常に印象に残り、博物館の在り方を考える上で非常に印象的でした。日本では歴史的な背景などを知らないまま観光を終わってしまうことが多い。十日町市に旅した方は、最初にこの博物館を訪れていただくとうれいすね」

地元では当たり前前のご地域を発信する力になり得る

長野県との県境、市の西部に位置し、八百有余年の歴史がある松之山温泉も、十日町市への旅を誘う役割を果たしている。草津温泉、有馬温泉と並ぶ日本三大薬湯であ



左/明治後期の「大日本帝国著名温泉一覧表」では小結の座にあったほど、松之山温泉は昔から湯治場として認知されていたと歴史を語る「ひなの宿ちとせ」代表取締役社長の柳一成氏。上/美肌効果もあるという温泉の効能を、家庭でも体感できるよう「松之山温泉合同会社まんま」が企画した「松之山温泉ミスト」は当初の予想を超える人気商品に。

りながら、ほかの二つに比べて圧倒的に知名度が低いと調査で判明したことが、自分たちが動き出す契機になった、と話すのはひなの宿ちとせ代表取締役社長の柳一成氏だ。

「知名度を上げていくため、一軒一軒ではなく温泉街全体で協力して」と、二〇〇八年に旅館経営者をはじめ地元の有志が出資して『松之山温泉合同会社まんま』



越後松代棚田群「星峠の棚田」(上)、「蒲生の棚田」(左・写真提供: (一)十日町市観光協会) ほか、十日町市内に棚田が広がり、ビューポイントとして、国内にとどまらず海外からも多くの観光客が訪れる。

を立ち上げました」

柳氏が代表を務めるまんまでは、松之山温泉の名物料理をつくりたいと、東京の著名な料理人にアドバイスを依頼。その中で、独自性を出そうと作っていた料理が、実は東京ではさほど珍しくないことが分かり、落胆した。さらには料理人からの、地元の何がおもしろいのかとの質問に対し、言葉に詰まったそうだ。

「米がおいしいなんて当たり前だと思っていました。自分たちが日頃食べ慣れているものに自信がなかったんですね。地味な地元の

料理を出してもお客様に喜ばれないのではないかと。でも、私たちにとってはありきたりのものが、外の人から見ると当たり前ではないし、むしろそういうものこそお客様は味わいたいのだと気づかされました。議論を積み重ねていく中で、地元の素材を生かし、磨くことこそ松之山の進むべき道なのだということが見えてきました」

そんな経緯から生まれた名物料理が、文字通り棚田の米を使った「棚田鍋」。地元産の妻有ポークを温泉で低温調理する「湯治豚」もまた人気が高い。朝ご飯の充実を

はかる「おいしい朝ごはんプロジエクト」も松之山の名を高めた。

「朝食はこの旅館でも出されませんが、考えてみれば旅館を離れる最後の食事。加えて朝食と言えば、十日町市が誇るお米が欠かせない。そこに山菜をはじめ松之山の食材を出すことで、まちの良さが際立つのではと思いました」

果たして、柳氏の発案は新潟県全域に広がるほどまでに注目された。さらには、地元の案内役と連携して旅行商品をつくり、雪景色や美しいブナの森「美人林」などを案内する旅行企画も始めた。都会の旅行代理店ではなく、地元の人が発案し、地域の魅力を伝えることに意味があると柳氏はいう。

「旅館は、地域のショーケース



新緑、紅葉、雪景色と、季節でブナの木々が表情を変える松之山地区の「美人林」。冬場はスノーシューでの散策も楽しめる。

的な存在だと考えるようになりました。滞在中に地域の魅力をかいま見られる、重要な場所なんだと思っっています。とはいえ、この松之山の一番の誇りはやはりお湯です。ですからよりもうれしいのは、お客様が『やっぱり松之山のお湯はいいね』とおっしゃって宿を後にしてくださいさることですね」

十日町市の豊かな暮らしに 心惹かれて移住を果たす

十日町市では、新たな特産品も生まれている。地元で醸される「妻

有ビール」だ。妻有ビール株式会
社代表取締役の高木千歩氏はも
と東京在住だったが、祖父母や
親戚が住む十日町には幼い頃から
頻繁に訪れていた。二〇一一年に
移住したきっかけは東日本大震
災、そして翌日に発生した長野県
北部地震だ。

「東日本大震災の直後、買い占
めが続く東京では、お金があつて
もものが買えない状況。自分はそ
ういうところで暮らしたいのかと
自問しました。十日町なら、田畑
がある。食べるものを自分で作る
生活が当たり前。ここには生きて

いくための力
があると思っ
たんです。二
〇〇七年の新
潟中越沖地震
の際、この地
域の方は湧き
水と薪ストー
ブで調理をし
たという話も
胸をよぎりま
した」

会社を辞

め、十日町市の地域おこし協力隊
に参加。その後、大好きな地ビー
ルが飲めるビアレストランの経営
を手がける中、お客様からの「十
日町の地ビールはないのか」とい
う一言がきっかけになり、ならば
自分でつくろうと一念発起した。
ビアレストランや醸造所の設
立・運営にあたり、高木氏が助け
られたのは、地元の密接な人のつ
ながりだという。

「困ったときには誰かに相談す
れば手を差し伸べてくれるし、人
を紹介してくれる。都会だと縁遠
く感じられる市役所も、何かを手
がける際に関係が近いのもこの地

域の大きな魅力ですね」

市の補助金に加え、インター
ネットを通じた資金調達など周囲
の協力を得て、二〇一七年一月に
会社設立。翌年の一月にビールの
仕込みを始めた。一カ月の熟成を
経て最初のお披露目となった「十
日町雪まつり」には、大勢の客が
訪れたそうだ。

「多くの人に支援していただい
たので、完成までは緊張感があり
ましたが、雪まつりでの出店で責
任を一つ果たせたという思いで、
ほっとしました」

そのおいしさは、その後のイベ
ントでの人気の高さや、松之山温



「麻織物」の神として信仰を集め国の重要文化財に指定されている松代地区の「松平神社本殿」。戦国武将たちが祈りを捧げ、上杉謙信寄進の小刀、日の丸の軍配が伝えられている。
(写真提供：十日町市)



山間部では、幻想的な朝霧の景色が見られる機会が少なくない。



「妻有ビール」代表取締役の高木千歩氏が手にしているのは妻有ビールのロゴが入った、再利用可能1リットル瓶。地元産のそばを使った「十日町そばエール」など、地産を意識したビールの開発に力を注ぐ。

1950年から続く「十日町雪まつり」は毎年2月中旬の開催。市民が主体の雪のイベントとしては国内初であることから、十日町市は「現代雪まつり発祥の地」とされる。写真は祭り開催期間中にメインエリアの越後妻有交流館キナーレで行われた雪上茶席の会場と十日町きもの女王2019。

(写真提供：十日町市)



「究極の雪国とおかまち ー真説！豪雪地ものがたりー」の日本遺産認定を祝うセレモニー。(写真提供：十日町市)

泉ほか地元宿泊施設、飲食店で
の需要の高まりが物語る。現在、
一般の小売りは醸造所での一リッ
トルの大瓶のみの直販に限られて
いるが、通信販売をとの全国から
の声に応え、小瓶での販売を計画
しているとか。イベント以外でも、
観光客が気軽に喉を潤せる日は遠
くないはずだ。

まちを離れた人たちが コロナ禍により 故郷を想う時代

まちと人が新たな道を進む中、
二〇二〇年春、コロナ禍に世界が
襲われ、十日町市もまた自粛の日々

を強いられた。だが、今回の取材で
お会いした方々は皆、遠く離れた
人たちとのオンラインによるつな
がりや応援、通信販売の依頼など
を元気の源としながら、前向きに
活動していて胸が熱くなった。
さらには、県内外の大学や専門
学校に通う十日町市出身の学生た
ちに、十日町の特産品を掲載した
カタログギフトを贈ったという、
市長の関口氏の話は印象深い。

「地域の魅力がいっぱい詰まっ
た『本で旅する十日町』というカ
タログギフトを送ったところ、思
いがけず多くの学生から感謝の
メッセージが届いたんです。高校
卒業後、一八歳になった若者が十

日町から出ていくのを何とかした
いと思っていました。その若者た
ちとようやくつながれたというう
れしさがありません」

故郷に帰れない中で市の市からの
プレゼントは、十日町を離れて暮
らす若者の心に優しく響き、大き
な励みになったことだろう。在
宅勤務が広がりつつある今、未来
が変わるのではないかと関口氏
は話す。

「業種にもよるかもしれませんが
が、どこでも仕事ができるとなれ
ば、都市圏の企業に就職したとし
ても、ふるさとに比重を置いた人
生設計ができるのではないでしょ
うか。コロナ禍は人々に大きな困
難をもたらしていますが、東京に
人とモノとカネを集中させ、大き
な経済効果を得るといふこれまで
の流れを、考え直す大きな転機に
なると思っています。豊かな暮らし
がある十日町で待っています、
と仰りたいですね」

実際、かつて妻有ビールの高木
氏が東京を離れたように、今回の
コロナ禍で地方の良さにあらため
て思いをはせた人は少なくないは
ず。『雪国での暮らしは大変』と長

近年は暖冬の影響によりまちなかの積雪量は
減ったとはいえ、大雪の年は圧巻の雪景色が
見られる。
(写真提供：十日町市)



年言われてきた十日町だが、日本
遺産の認定に象徴されるように、
当たり前でお荷物と思われていた
存在が、地域に豊かな恵みを生み
出す源でもあったと、前向きにと
らえる動きが出てくることも期待
できそうだ。

芸術祭の誕生から、二〇年。ま
ちに活力が生まれ、受け継がれて
きた歴史や伝統文化が見直される
中、芸術作品のある景色を日常と
して育った子どもたちが、信濃川
のサケのように自然と故郷に戻っ
てくる日はそう遠くないのもし
れない。